

JELC NEWS

ジェラニュース 第25号 2011年8月15日発行 発行責任者 森川博己

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援／アジア子ども支援／ブラジル子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

「お前たちは、わたしが飢えているときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言っておく、私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」 マタイによる福音書 25章35節～36節、40節



ルーテル門司幼稚園

東日本大震災 被災者支援活動 特集号

3月11日に発生した東日本大震災の被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。この号では、JELAがこれまでに行った、あるいはこれから行おうとしている被災者支援活動を中心にをご紹介します。地震発生直後に、JELCが他のルーテル教会等と取り組んでいる「東日本大震災ルーテル教会救援」の働きに協力しつつ、難民支援・奨学金給付・子ども支援といったJELAの本来的な事業を被災者支援とむすびつける形で様々な活動に取り組んでいます。

【この号にはこんな記事が】 JELAの被災者支援活動(森川博己)……2 被災地で難民といっしょにボランティアをして(石井宏明)……5 大学院での学び・被災地でのボランティア活動(ミョウ・ミン・スウェ)……6 第8回世界の子ども支援チャリティコンサート結果……7 リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座4期生募集 など……8

JELA の東日本大震災被災者支援活動について

JELA 事務局長・森川博己

3月11日東北地方を襲った大地震、大津波、原発放射能の被害は、いまだにその全容も把握できない状況ですが、地元被災者の粘り強い努力と全世界からの熱い支援によって、少しずつ復興への歩みが始まっています。

その中であって JELA は、震災直後に組織されたルーテル教会の「東日本大震災ルーテル教会救援」に参加し、緊急支援金として 100 万円を拠出したしました。その後もこれに協力しつつ、JELA 独自の活動も開始し、現在は次のような活動に取り組んでいます。現地のニーズを踏まえながら、さらにお役にたてることを見つけ出し、力を注げればと思っています。

1) 大学生への奨学金給付

家の一部または全部が損壊したり、主たる家計維持者が死亡するなどしたこと、経済的に苦しい状態にある複数の大学生に、合計 240 万円の奨学金を提供することにしました。

2) 難民ボランティア派遣

日本で在留資格を得た多くの難民の方々は、地震発生直後から被災地でボランティアをしたい、日本を助けたいという思いがありました。これに応える形で難民支援協会が、4 月下旬からの 1 か月、日本人と難民のボランティアを編成し何回かに分けて派遣するという構想を示しました。JELA はこれに共鳴し、東京から岩手県花巻市までの往復 10 回分のバスチャーター代(約 200 万円)を提供しました。現地でのボランティア活動の様子は、毎日新聞や NHK テレビ「おはよう日本」その他のメディアで取り上げられ、難民への理解が深まる機会ともなりました。詳細は 5 ページ以降の記事をご覧ください。

3) クッキー子ども支援

国内(主にルーテル幼保連合会)の幼稚園・保育園や、JELA が支援しているインドやブラジル子ども支援施設、あるいは米国のルーテル教会の日曜学校子どもたちに、被災地子どもたちに向けたメッセージや絵を描いてもら

い、これをクッキーと共に届けるプロジェクトを長期的に行います。現在千通以上のメッセージが届き、被災地へ届ける準備をしています。この働きを通して、被災地子どもたちと、その他の地域の世界子どもたちとの心の交流が生まれればと思っています。



世界中から届いた絵とメッセージ



自作の絵とメッセージを示す、牛津幼稚園(熊本県)の年長児たち

4) 高校生の就学継続支援

震災直後に、米国にお住いの引退宣教師の先生方から、寄付の申し出がありました。日本で奉仕された先生方は日本のことを心配され、米国の知人・友人や教会にも幅広く声をかけてくださり、被災者に役立てるように寄付金を送っていただきました。これを震災で家が経済的に困窮し、就学継続をあきらめかけている高校生を救うために役立てることにしました。

宮城県のミッションスクール、尚絅学院高校に、津波で家が全壊したり親が仕事をなくした結果、就学継続が困難な生徒が 40 名前後いることがわかりました。全員を救うのは無理なため、困難度の最も高い生徒を数名推薦していただくことにしました。JELA 事務局長の森川とアドバイザーのグリテベック両名が現地を訪れ、生徒自身とご家族に二

日間かけて面談した結果、3 名の方たちを高校卒業まで、学費その他について全面的に支援することにしました。

支援にあたっては、米国で集まった寄付金(約 400 万円)に加えて、6 月に恵比寿の JELA ホールで催された、中村啓子さん(NTT 時報の声、三浦綾子作品の朗読 CD 等で知られる、ナレーション第一人者)を主な出演者とするチャリティ公演「トークと朗読でつづる 星野富弘人と詩の世界<でも その傷のところから>」で捧げられた数十万円等、東日本大震災被災者支援として捧げられた寄付金を用いさせていただきます。

5) その他

時期や内容は現時点でははっきりしませんが、リラ・プレカリア(祈りのたて琴)の奉仕等についても、それが被災地で必要とされることがあれば、現地のニーズに合わせた形で、お役にたればと考えています。

わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。(マタイによる福音書 25 章 40 節後半。イエス・キリストの言葉)



高校生の就学継続支援

就学継続支援が決定した尚絅学院高校の 3 名の高校生とご家族の皆様から感謝の手紙が届きましたのでご紹介します。手紙は支援を直接伝えた JELA や、米国から寄付金を送ってくださった引退宣教師の皆さんあてに書かれています。寄付金を提供して下さったすべての皆様に深く感謝して書いてくださったものであることを申し添えます。

図書館の司書をめざす、松野朱莉さん(高校 3 年生)より



私は平成 23 年 3 月 11 日(金)午後 2 時 46 分、東日本大震災の時、学校でホームルームの授業を受け、教室に

おりました。激しい揺れが長く続き、恐怖でふるえながら机の下に隠れていました。先生の指示に従い、みんなで避難しました。その後、私は家が遠いため、一晚学校に泊まりました。家とも連絡がつかず、自宅が石巻の沿岸部なので家族のみんが無事かどうか、家は大丈夫なのか心配しました。

学校では、発電機を使い、食事もいただき、不自由なく過ごさせていただきました。次の日の朝、先生が石巻まで送っていただきましたが、道路が切断され、通行不能となり、また学校に戻りましたが、夜になり父と叔父が学校へむかえに来てくれました。家族皆、無事だったことを知り、すごくほっとしました。

私の自宅は、津波の被害で全壊になり、戻る事が出来ず、父の実家にてお世話になっています。父も家族も仕事が無くなり、私も学校に通えるかどうか不安な気持ちでした。私は大学へ行き、図書館の司書となり、働くことが夢なので、その夢をあきらめかけておりました。そんな時、日本福音ルーテル社団様からご支援をしていただけるお話をいただき、喜びで希望を持つことができました。とても感謝しております。学校でキリスト教を学び、感謝の念と希望を持ち、有意義な学校生活を送りたいです。

津波に襲われた沿岸地区で日本料理店を経営されていた、松野朱莉さんのご両親より

マグニチュード 9.0 の大地震・大津波により、私共の自宅及び店舗は全壊となりました。職場も住居も失い、暗中模索の状態、ただ茫然としておりました。娘の学校への通学も経済的な不安があり困難かと思っておりました。この度の日本福音ルーテル社団様のご加護により卒業迄通学可能となりましたこと、家族一同本当に安堵致しました。日本福音ルーテル社団様には心から感謝致しお礼を申し上げます。私共も一日も早い復興に向け、店の再建を目指し、頑張りたく存じております。本当にご支援の程、ありがとうございます。



松野さんのご両親(右)に事情を聞く森川事務局長

小説家になりたい、岩佐奈保さん(高校 1 年生)より

こんにちは。尚絅学院高校 1 年生の岩佐奈保です。この度、東日本大震災で被災した人に支援して下さるということで、その中の一人として選んでくださったことを心から感謝いたします。

私の父は中学 2 年の秋に心筋梗塞で亡くなりました。あまりに突然だったので、とても悲しくなり、父の死を受け止めることができませんでした。しかし、周囲の人々の励ましのおかげもあり、何とか受け止めることができるようになりました。やっとな受け止めた矢先に、今度の東日本大震災が起き、住んでいた家が全壊し、友人とその家族も亡くなってしまいました。大津波で流された家を見て、私の頭の中は真っ暗になってしまい、それゆえ、何も考えられなくなり、ただ呆然としていました。この事に関しても、徐々に受け止めてはきていますが、やはり所々それができなく、いまだに信じるこ

とができません。

現在、私の家族は山間の町に家を借りて暮らしています。学校へは車、電車、バスを乗り継いで、1 時間半かけて通っています。学費と交通費が高いので、母に申し訳ないと思っていました。進学や将来の夢を諦めかけていた時、日本福音ルーテル社団の支援を受けられるかもしれないというお話があり、もう一度夢を追いかけようと思えるようになりました。

私の将来の夢は小説家になることです。そのため、大学の表現文化学科に進学したいと思っています。進学するには、高校で上位の成績を取らなければなりません。今までは目標がなく、勉強に力が入りませんでした。夢に向かって勉強する力が湧いてきました。自分から勉強したいと思ったのは、生まれて初めてです。この機会を与えてくださった日本福音ルーテル社団の皆様と、神様に感謝したいと思います。そして、もし進学の夢がかないましたら、今度は小説家になる夢に向かって、より一層勉強に励みたいと思います。本当にありがとうございます。



JELA アドバイザーのグリテベック(左)と岩佐さん

5 人家族を一人で支える、岩佐奈保さんのお母さんより

こんにちは、初めまして。私は宮城県の南端、仙台市から約 40 キロに位置する山元町に住んでいる岩佐雅江です。76 才の父、75 才の母、21 才の長女(* 下記の編集者注参照)、15 才の次女(奈保)の 5 人家族で暮らしております。山元町は海、山とも近く、冬は暖かで、漁業、農業が盛んです。苺、りんご、米が実る、事件や事故も起きない静かな平和な田舎です。

その町が 3 月 11 日、大地震と大津波に襲われて全く別の町に変わってしまいました。穏やかで、幼い頃からの遊び

場だった大好きな海が、突然荒れ狂い、町のみ込みました。800 人もの人々が亡くなり、海岸地区の家屋は全て流され、何も無くなりました。田も苺畑も瓦礫の山と化しました。我が家も全壊し、母と長女は走って逃げ、木に登って津波から逃れました。2 年前に夫を心臓病で突然亡くし、今度は夫の建ててくれた、思い出のたくさん詰まった家も、先祖からの田畑も津波に奪われてしまいました。

4 月から高校生になった奈保は、地震、津波の恐怖と今後の生活の不安で、毎晩ふとんの中で泣いて眠れない日が続きました。夢や希望に満ち溢れるはずだった春が、失望で先が見えなくなってしまいました。私も、病気で寝たきりの父を含め、家族 5 人の生活を支えるには力不足で精神的、経済的な不安が増すばかりでした。そこに、日本福音ルーテル社団様からご支援のお話がありました。奈保の学費や交通費は生活費の三分の一以上を占めておりますので、親子とも心が軽くなります。ずっと暗い顔をしていた奈保が、支援を受けられることになってから、将来、小説家になりたいと明るく笑って夢を話すようになりました。

遠い国の、見ず知らずの私達が、皆様のご支援を受けるのは申し訳ない気持ちですが、それ以上に、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。深い悲しみの淵にあっても、すぐ隣に喜びがあることを、神様に導かれて生きることを実感しました。日本福音ルーテル社団の皆様に出会えたことを感謝します。どうぞ皆様お元気で、神様の恵みがあります様、遠く日本の地からお祈りしています。さようなら。

* 注：長女はモヤモヤ病の手術を受け、自宅療養中。



岩佐さんのご家族と。右端が母親の雅江さん。

博物館の学芸員になるのが夢の、佐藤智恵さん(高校 3 年生)より



この度は、支援して下さいありがとうございます。皆様にはとても感謝しています。私の家は、今回の震災によって、住む家も家業も失ってしまい、大学進学及び自分の夢をすべてあきらめるしかない、将来に絶望する毎日でした。しかし、今回皆様の支援を受けて再び十分な学びを受けることができると知り、将来の希望を持つことができました。皆様のおかげで学校に来ることができ、そして学べることができ、とても幸せに思います。いつ、どんなときも皆様のお蔭で今の自分があるということをおぼろげに、毎日を精一杯、そして大切に過ごします。

一日半歩ずつ前進していきたいという、佐藤智恵さんのお母さんより

私は今回 JELA に支援の手をさしのべていただいた佐藤智恵の母です。お陰様で娘は毎日学校へ通っています。今回、学費や交通費など、卒業するまでの全額を JELA より支援していただく事になりました。東日本大震災による津波で家は水没し、生計を立てていたイチゴのビニールハウスが倒壊、一瞬にしてガレキとヘドロの山に変わってしまいました。津波以降、収入はゼロになってしま



い、高校を退学させなければならぬのではと思い悩みました。そのような底の時に JELA が支援して下さい、感謝の気持ちで涙が止まりませんでした。今は仮設住宅で生活しています。娘は私の実家から通学していますが、新幹線代が高いので、来週中にも仮設住宅に連れて来る予定です。夫は、家族の為に単身で北海道に移住し、仕事をする事に決めました (* 下記の編集者注参照)。これからは家族バラバラの生活で、正直不安でいっぱいです。JELA の方がおっしゃいました。「世界のたくさんの方々があなた達の為に祈っています。決して一人ではありません」と。現実にくじけそうになった時、この言葉を思い出しては元気づけられています。今は一日一歩とはいきませんが、半歩ずつでも前に向かって進んでいきたいと思っています。娘に支援の手をさし、のべて下さった方々、本当にありがとうございました。

* 注：北海道での職はイチゴ栽培指導員。雇用期間・収入ともに限定的な内容。



佐藤さんの母親と

被災地で難民といっしょにボランティアをして

認定 NPO 法人難民支援協会
常任理事・事務局長代行 石井宏明

●地震発生直後のこと

さる 3 月 11 日に起きた東日本大震災では、いままでにない広範囲、規模で被害が広がりました。ご家族を失われた方、被災されて自宅に戻れない皆さまには、心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

認定 NPO 法人難民支援協会 (以下、JAR)には、震災直後から普段から支援している在日難民(この稿では申請中の方を含みます)の電話が鳴り続けました。地震の恐怖を語る方、福島第一原発の事故に関する心配、明日の生活を心配するもの等さまざまで、中にはすぐに支援物資を持って会いにいかねばならない悲惨なケースもあって、JAR ではいち早く連絡が取れた難民の元を訪れ、支援物資を渡しながら話を聞き、できるかぎり詳しい放射能汚染の話、今後の生活の相談に乗るといった活動を開始しました。

●在日難民の被災地への思い

一方で、3 月 14 日(月)ごろからそうした難民から毎日かかってくる電話の 20 ~ 30 %が、助けを求めるものではなく、自分(たち)が被災地の方々のために何かしたい、というものでした。中には、祖国で震災に遭い自ら組織して救援活動を行ったという「強者」もいて、「すぐにも自分で現地に行きたいがどうすればいいか教えてほしい」という方や、「JAR と協力して被災地でボランティアしたい」という希望も聞きました。多くが自身安定した生活を送っていないと思われ、また多くの難民ではない同国人が急いで出国していく中、難民が自分の置かれた状況をさておいて、映像を見てショックを受け、また自分たちより悲惨な状況にある方々を助けたい、と強く思う気持ちがひしひしと伝わってきて、思わず「分かった。ただ言葉の面でも外国人に慣れていない被災地の方のところへ直接ボランティアを申し出ても難しいだろうから、僕が何とか難民のひともボランティアに行けるようにするよ」と答えてしまいました。正直、被災者の方々への気持ちが難民の方ほど真摯になれていなかった自分自身を恥ずかしく思う気持ちも湧いていました。

●難民ボランティア派遣の構想

そうした難民の声に背中を押されるかたちで、関東地方の難民支援を行うと同時に、被害のひどかった東北地方での支援活動を震災後約 1 週間後の 3 月 18 日に最初の東北への調査チームを派遣した後、各方面からの支援を得て 3 月末には岩手県内陸部の花巻市に拠点置き、法律支援、女性支援等を始めるとともに、難民ボランティア派遣の準備を始めました。現地での調整、とくに市街地の被害が激しく、市役所の職員の約 1 / 3 が亡くなられたり行方不明になっていた岩手県陸前高田市をターゲットに決め、市のボランティアセンターの方と交渉して、実は相当に忙しかれていてセンターの職員にそうした申し出をしても応えてくれるかという不安もありましたが、「外国の方が助けに来ていただけるのはうれしいし、とても助かる」と快く引き受けてくれてほっとしました。

●実際のボランティア活動

そうした中、JELA が東京・花巻間の週 2 往復の中型バスの運行を担っていただけるといううれしい申し出もあり、4 月 28 日、第一陣のグループ 25 人を乗せたバスが東京・四ツ谷の JAR 事務所の前を出発しました。わたしもその第一陣に同行し、ボランティアの方々と花巻市営のキャンプ場で一夜を過ごしました。到着後、横になって休む間もなく、そのまま地元のバスで陸前高田に向かい、陸前高田市ボランティアセンターで割り当てられた場所で、休憩を挟んで 10 時から 15 時の約 5 時間ボランティア活動を行います。ボランティアの内容は、田畑のがれき撤去、道路・側溝の泥かき、個人宅の家屋内の清掃、また地域のお祭りでの駐車案内まで、多岐にわたります。ボランティアの多くは、1 日の自分たちの仕事で目に見えてきれいになっていく被災地を見て手応えを感じ、被災者のことを思うつらい気持ちの中にも、充実感を得られ、何度も参加されたり後に家族の方にも薦めてくださり親子で参加されたりと、満足感を得て帰っていきます。



JELA が手配したバス

●活動から得られたもの

もともと難民の皆さんの熱い想いから始まったこのプロジェクトですが、平均して全体の 15 ~ 20 %の参加者が難民で、それ以外にも運営も助けてくれた上智大学の留学生をはじめとした外国人も多く参加してくださいました。そうした多様な(国籍・民族だけでなく年齢や性別もバラエティに富んだ)参加者が、キャンプ場のテントで共同生活をし、一緒に自炊するなど、ボランティア活動以外の時間でも通常の都会の生活では味わえないほど深くお互いを理解する時間をつくれたことは、ボランティア活動だけではない貴重な体験になったと多くの参加者は言います。アンケートに答えてくれた多くの日本人からは、「難民のことをまったく知らなかったが、彼らの真面目さやとくのがれき撤去で発揮された能力を知れてよかった」、「行く前は難民のことは怖いと思っていたが、実際に接してみてイメージが変わった」といった言葉もいただき、本当にこのプロジェクトをはじめてよかったと思えました。



陸前高田市で。最前列左端が石井さん

●今後へむけて

いくつかの試行錯誤を経て、現在は週 1 便の東京から花巻キャンプ地へのバスとほぼ毎日花巻から陸前高田へのバスを運行しています。7 月 4 日までに約 250 人がこのプロジェクトを通して陸前高田のボランティアに参加し、うち外国人が約 35 %、そのうちの難民は半数の 45 人でした。この活動は、8 月、9 月の大学の夏休みに再び活況を呈することが予想され、大きな変更がなければ 11 月まで継続する予定です。このプロジェクトは、JELA 様や上智大学をはじめ多くの方々のご協力のおかげでこれまで実施することができました。この場を借りて心より感謝申し上げますとともに、今後もかわらぬご支援をいただけたら幸いです。

大学院での学び・被災地でのボランティア活動

東京大学大学院修士課程
ミョウ・ミン・スウェ

○大学院に入るまで

わたしの名前は、ミョウ・ミン・スウェです。ビルマ（現：ミャンマー）出身で、1991年に日本に政治亡命し、2005年に難民として認定されました。2007年4月から2011年3月まで、関西学院大学総合政策学部で国際開発政策について勉強しました。日本で難民特別奨学金制度を初めて導入したのが関西学院大学であり、わたしはその第一期生でした。学校側は授業料免除と奨学金を提供し、勉強に専念できる環境を整えてくれました。

2010年の春頃から日本人学生と同様に就職活動をしました。難民であることから門前払い状態が続きました。就職がうまくいかなかったことや、大学院に進学したい希望もあったことから、就職活動を辞め、大学院進学に専念しました。そして、今年の3月に東京大学総合文化研究科（国際関係専攻）の、人間の安全保障プログラム修士課程に進学する試験に合格しました。

わたしは経済的に大学院に進学するのがとても大変な状況であるだけでなく、関西から東京に引っ越し、住居をさがすという問題もありました。そのわたしの問題を真剣に考えてくれたのが、日本福音ルーテル社団（JELA）でした。JELAはわたしに住居を提供してくださり、勉強に専念できるよう支援してくれました。JELAの支援はわたしの勉強に大きく役立っています。もし、JELAの支援がなかったら大学院で学ぶことはできなかったでしょう。JELAが支援している難民支援と人道支援は難民の自立に大きな意味を持っているとわたしは思います。

○研究課題と将来の希望

大学院では在日難民の日本社会での自立と社会統合の可能性について研究しています。2009年から毎年夏休みに、タイとビルマの国境地域の難民キャンプに、同僚や後輩の学生を連れて行き、難民問題を通して平和の大切さを勉強するという、スタディツアーを実施しています。今年は研究の一環として3度目の訪問になりました。将来は学者になり、国際政治、国際平

和や難民問題を学生に伝授していけることをめざしています。わたしを学者の道に導いてくれた関西学院大学、そして大学院での研究に専念できるように住居を提供してくれたJELAに恩返しをして、わたしを保護してくれた日本社会に貢献したいと考えています。



タイのメーラーキャンプで

○東日本大震災被災地でのボランティア活動

4月28日にわたしは、JELAと難民支援協会（JAR）が協働で実施する、東北の被災地へボランティアを派遣する働きに参加しました。3月11日に起きた東北地方での地震の情報や津波の被害に遭った人々の状況をテレビで毎日目にして、「自分はこのままで良いのか、自分に何ができるか」と自問自答しながら毎日を過ごしてきました。そんなときにJARから電話があったので、被災地でのボランティア活動を難民の人たちがやりたがっている、と話しました。それが実現したのです。

はじめは、被災地がどうなっているか、よくわからないまま岩手県陸前高田市に向かいました。東京からのバスに25人ほどが乗った最初のグループに参加しました。ビルマ難民は私を含めて4人、アフリカ系難民が1人、イラク難民が1人、合わせて難民6人と、外国人留学生、日本人学生・社会人等が参加しました。

○被災地での心のふれあい

4月29日に、陸前高田市矢作町の被災地に行きました。最初に任されたのが、民家のイチゴ農園ビニールハウスのガレキ撤去でした。はじめは何をどうすればいいのか見当がつかなかったものの、作業は着々と進んでいきました。鉄パイプが土の中に埋まっているのを三人がかりで抜くなど、力を使った仕事が多かったです。時間が経つにつれ作業効率が上がり、道具などを用いて、その日の作業だけでビニールハウス3つと、津波で流されてきた瓦の撤去ができました。イチゴ農園の

ビニールハウス撤去をやっている時に、地元住民の代表の人が見に来てくれました。その時、私はその人と言葉を交わしました。

「わたしは日本に来て20年経ちました。日本はわたしにとって『第2の故郷』です。だから皆さんの力になりたいと、ボランティアをしに来ました」と話した時、その男性は「ここ陸前高田市を、『第3の故郷』にしてください」と言ってくれました。わたしがその男性に、「お父さんたちは『天災』で僕らは『人災』です」と言った時に、「その言葉は効いたなー」と涙を流したのがいまだに忘れられません。私たち難民は、独裁者による迫害の対象になった、つまり人による人災であって、東北にいる皆さんは自然による天災。私たちは怒りをぶつける相手がないから、大きな苦勞をおぼえているのではないかと、その男性の涙がそう訴えているように映りました。



被災地住民、ボランティアの仲間とミョウさん(中央)

○ボランティア活動から学んだこと

被災地での5日間のボランティア活動を通して私が感じたのは、自然の脅威は本当に怖いものだ、ということです。今回のボランティア活動を通して東北の皆さんに少しでも力になれました。また、生きることの素晴らしさ、負けないぞという忍耐強さ、そして共に生きる喜びを再確認することができました。

これから、難民も在日外国人も日本人も、日本というこの地で共に暮らせる日が来ることを願い、復興で活気ある東北地方が必ず実現することを信じながら、引き続きボランティア活動に参加していきたいと思っています。このボランティア活動は、JELAからの交通費支援が無かったら実現しなかっただろう、とわたしは思います。人間としてお互い助け合い、共生していく大切さを、この震災を通して学ぶことが出来た、とわたしは感じています。

第8回世界の子ども支援／東日本大震災救援 チャリティコンサートを終えて

5月13日から5月30日にかけて、全国の日本福音ルーテル教会等10会場（甲府、松本＜中央公民館ホール＞、保谷、小岩、田園調布、蒲田、知多、清水、神水、玉名）で「第8回世界の子ども支援チャリティコンサート」を開催しました。演奏者は今回も、昨年好評をいただいた上野由恵さん（フルート）と圓井晶子さん（ピアノ）。昨年と違うのは、4つの会場（小岩ルーテル保育園、田園調布幼稚園、蒲田ルーテル幼稚園、玉名ルーテル幼稚園）で園児むけプログラムをご用意いただいたことです。いづこも笑顔と歌声があふれるコンサートとなりました。今回のもう一つの特徴は、演奏者お二人とその関係者の全面的なご協力により、讚美歌フルート名曲集「アメイジング・グレイス」を製作し、各会場で販売したことです。この収益は東日本大震災被災地支援のために用いられます。一枚2千円（送料別）でご購入いただけますので、よろしくお願いします。

10会場（11公演）の来場者総数は約1100名、寄付金総額（チャリティCD売上を含む）は約150万円にのぼりました。会場を提供していただいた皆様、ご来場くださり寄付を捧げてくださった皆様、そして協賛団体の皆様に心より感謝申し上げます。寄付金につきましては、東日本大震災で被災された方々、とくに子どもたちのために利用させていただきます。ありがとうございました。



5月13日 甲府教会



5月14日 松本中央公民館ホール



5月15日 保谷教会



5月16日 小岩教会



5月19日 田園調布教会



5月20日 蒲田教会



5月21日 知多教会



5月22日 清水教会



5月28日 神水教会



5月30日 玉名教会

世界の子ども支援＋東日本大震災救援 チャリティCD

讚美歌フルート名曲集 **アメイジング・グレイス**



- 1.「わがゆくみちおぼろ」（教会讚美歌 476番）
- 2.「しずけいのりのり」（同 370番）
- 3.「はかりもしられぬ」（同 346番）
- 4.「このまわれをあいし」（同 303番）
- 5.「なやみのなかより」（同300番）
- 6.「いま主のみえを」（同266番）
- 7.「主よみもとに」（同 471番）
- 8.「たよりまつる」（同 374番）
- 9.「のやまもひと」（同220番）
- 10.「いつくしみふかい」（同 371番）
- 11.「めぐみふかきこえて」（同294番）
- 12.「十字架のもとに」（同386番）
- 3.「くすしき恵み」（讚美歌21 451番）（Amazing Grace）

フルート 上野由恵

2000円（送料別）

お申し込みは メール：jela@jela.or.jp または ファックス：03-3447-1523 で

リラ・プレカリア(祈りのたて琴) 4期生募集開始

第4期研修講座(2012年4月～2014年3月)の生徒募集を9月から開始いたします。資料のご請求やお問合せにつきましてはJELA事務局まで。



↑ホスピスでの実習風景

「言葉がなくても祈れるように、
神様は音楽をくださった」



→ ベッドわきでハープを奏でる
キャロル・サック
(リラ・プレカリア指導講師)

支援者一覧

(2011年3月1日～2011年6月30日)

浅見正一／日本福音ルーテル池袋教会／石崎勝／石原登志子／市原周子／江澤妙子／太田滋子／大谷忠雄／大塚真佐子／大坪敏則／小川幾代／榎木芳昭／兼岩恵美子／金田貴子／上窪松子／京谷信代／日本福音ルーテル教会九州教区／倉重ミドリ／倉知延章／小松かつみ／特定非営利活動法人埼玉県介護支援専門員協会／坂根信義／佐藤義雄／崎山たまも／桜井永之／ジェリー・ハルボセン／杉浦りえ／鈴木やす／世界のこども支援チャリティコンサート席上献金(日本福音ルーテル蒲田教会、同小岩教会、同甲府教会、同清水教会、同玉名教会、同知多教会、同田園調布教会、同保谷教会、同松本教会)／関口佳子／高田紀子／高津和子／瀧原哲／高橋悠美子／高橋要子／日本福音ルーテル玉名教会／綱春子／中川浩之／中村孝治・敬子／西恵三・千恵／萩原耕介／早瀬康平／東日本大震災支援チャリティ朗読会(中村啓子他)／益永和代／松田英子／宮岡仁美／宮本裕美／牟田青子／宗方美代子／めぐみ福音キリスト教会／森保宏／森田七三郎／山県順子／山際喜佐夫／山本一男／山本了／日本福音ルーテル湯河原教会／弓削万里／若原奇美子／

Patrick Bencke／Lowell and Junko Gretebeck／Wesley Center／匿名複数

海外支援者

Pearl Aaker／Harold and Ruth Aasland／Gayle Adair／Aaron and Lynette Albrecht／Marbury and Silvia Anderson／Mary Ellen Andersen／Bryan Bergh／David and Polly Boline／Margaret and Walter Boss／Thomas and Anne Brower／James and Nancy Bullock／Betty Burns／Barbara and Joseph Chesley／Marilyn W. Cooper／Mary F. Cooper／Eleanor Cunningham／Kenneth and Eloise Dale／Pricilla DeChaine／John and Ann Marie DeYoung／Joan Doeden／Mary Dybvig／Wilbert Ericson／Kris Geslin／Lisa Gretebeck／Stan Hana／Marilyn Hays／Vivian Heig／Ellen Hilsheimer／Roselyn Holte／Grace Ingulsrud／Paul and Joyce Johnson／Alton and Margretta Knutson／Lilly and James Krause／Jerry and C. Gail Larson／Gary and Janna Luebben／Al Luing／Deloris Martin／Jeff and Evelyn Murray／Irene Nelson／Marge Niebergall／Mike and M. Kay Northrup／Norman and Barbara Nuding／Stephen Nuding／Lois Okerstrom／Norman and Barbara Olson／Oliver Parsons／

David and Nahoko Person／Lynn Person／Arthur and Mary Rouner／Kay and Vic Rudek／Mr. and Mrs. Donald Schrage／Carl and Wanda Shively／Ralph Skoe／Carol Smalley／Thomas and Marty Snapp／Tyra Snapp／Thomas C. Socha／Heidi Street／Emily Taylor／Marie Tveit／Naomi Vanderwaal／Ted and Betty Wentz／Brian and Linda Willette／Rev. and Mrs. Charles Wilson／Paul and Katie Winemiller／匿名複数

海外支援教会／その他の団体

Calvary Lutheran Church, Lee IL／Faith Lutheran Church, Forest Lake MN／Gloria Dei Lutheran Church, San Jose CA／Hosanna Lutheran Church, Lakeville MN／Our Savior's Lutheran Church, Ackley IA／Prince of Peace Lutheran Church, Rockton IL／Sacred Art of Living, Bend OR／The South Carolina Synod, Columbia SC／St. Luke Lutheran Church, St. Paul MN／St. Mark Lutheran Church／St. Marks United Methodist Church, Hampton VA／Trinity Lutheran Church and Sunday School, Oakland CA／Tucson Meadows Church Group, Tucson AZ／United Evangelical Lutheran Church, Schulenburg TX／Women of Hope Lutheran Church, Satsuma FL／Women of St. Anthony Lutheran Church, St. Paul MN

以上、敬称略。ご支援ありがとうございます。匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集後記

東日本大震災直後、自分たちに何ができるかと思い悩んでいた時に、デビッド・パーソン先生(元日本宣教師。現在は米国で牧会中)から届いたメールに記されていた言葉(作者不詳)が大きな励みとなりました。原文の英語を私訳したものを以下にご紹介します。

「現在あなたがどんな車を運転しているとか、どんな家に住んでいるとか、銀行口座の残高がいくらあるとか、着ている服がどう見えるとか、そんなことはみんな、50年後には何の意味もないことです。でも、もしあなたが今、子どもたちの人生にとって重要なことを行ったなら、50年後の世界は、少しは良い方向に変わっていることでしょう。」(M)